

里地通信 5月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

会員事例紹介 北信州は地域資源の宝庫です

寄稿 鷲尾恒久さん
長野県飯山市役所



千曲川最下流の雪の里

スキー民宿、きのこづくり

飯山市は、1954年8月、1町6カ村の合併で誕生した。56年には2カ村を合併して、現在の市域になっている。飯山盆地の中央を昔ながらの千曲川がゆったりと流れ、周囲の山並みは優しく、ふるさとの原風景がここにはある。

奥信濃と言われるこの地域は、雪深い地域でもある。そのため、高度経済成長が始まるころまでは、冬の出稼ぎが続いていた。米作りとワラ仕事だけでは、生計を維持することが難しかったのだ。その出稼ぎを何とかなくしたいという思いで始めたのが、裏山を活かし

たスキー場の開発、民宿の経営ときのご栽培であった。飯山市誕生間もない、50年代後半のことである。スキー場では戸狩温泉スキー場と信濃平スキー場が地域住民出資の経営として成長し、斑尾高原スキー場などとともに、スキーリゾート地帯を形成している。農家民宿は経営を拡大して周年経営もなされるようになり、きのこ生産は専業として9桁に届く生産額を上げる農家も出現している。

イベントづくり

地域資源を活かしたソフト事業が展開されるようになったのは、80年代前半のことだ。雪を活かしてきた先人に学び、利雪、親雪と言われるようになり、83年から「いいやま雪祭り」が始まった。明るい雪国は、何も札幌だけじゃないという思いがあった。菜の花まつりが始まったのは、翌84年のことだ。桜だけでなく、菜の花の花見があったっていいじゃないかというのがきっかけだ。5月の連休、全国から何万人という人達が訪れている。残雪の残る山並みを背景に千曲川が蛇行し、瑞穂の丘に咲く菜の花は、心休まる、まさにふるさとの風景である。

飯山仏壇や内山紙という国の伝統的工芸品を素材として、85年からは「奥信濃特産祭り」が行われている。市街地西側の寺並をつなぐ遊歩道を整備していったのは、このころからだ。地域の山菜を資金源とするため、とみくら市がスタートしたのもこの後である。足元の資源を見直し、みんなで磨いて情報発信すれば、何とかかなりそうだと気づいてきた。

自助、互助、相互扶助の地域づくり

天は、自ら助くるものを助く、という。水田稲作中心の飯山には、昔からこうしたお互いに助け合って生きていくための風土があった。山の上から雪解け水を引いてくるためには、共同作業が欠かせない。水路の手入れ、草刈りなどの協働普請だ。秋口は枯れ葉を水路の外に出しておかないと、詰まって災害を引き起こしてしまう。代掻きをするにも、順番で行わないと水が回らない。田植えなどは、隣近所での共同作業である。お互いに自分のたんぼの田植えを手伝ってもらい、手伝ってもらった分、手伝いに出向く。結いという形態である。

社協を中心とした福祉ボランティア組織に、とうど塾がある。「とうど」は「田人」と書く。田植えなどの農作業の労力交換による、助け合いのことだ。そして、とうどをする人を「とうど衆」という。とうど塾はもともと福祉ボランティア養成講座だが、受講生を中心として、今では高齢者福祉活動など様々な実践活動を展開している。

集落や旧村単位の活性化組織、地域づくり団体も数多い。自分たちの地域をなんとかしなければ、という強い思いがある。今のまま、行政だけに頼り切っている、じり貧に陥ってしまうという切迫感に駆られて、それぞれ個性的な活動をしている。これらの活動に少しでも手助けできたらと制度化したのが、地域づくり事業である。集落の将来構想策定に関しては、構想印刷費に対して10万円（9割）限度の補助金。構想実現のための事業に対しては、200万円（9割）限度の補助金を出すというものである。

共同の露天ぶろ設置、螢水路の整備、桜の植栽や案内施設、小公園の整備などが、地域住民の知恵と汗を集めて実現している。それぞれ、自然文化や歴史など、地域の個性を活かしたものだ。構想から計画へ、そして実現へとすべて地域住民が進めるものだけに、完成した施設などの管理にはおのずから手抜きというものがない。

現在も、自分たちの集落の将来像を描こうと、取り組んでいる集落は数多い。行政としては、自助意欲のあるところがどんどん出てくることを期待している。

富倉の手打ちそば

豪雪、山間、地滑り、過疎

富倉地区は、飯山から峠を越して上越へ通じる国道292号沿いの、県境近くの山間地である。市街地に比べて積雪量ははるかに多く、地滑り地帯の傾斜地であることなどから、過疎化が著しい。昭和35年には240世帯、1,234人いたのが、平成7年には106世帯、288人と極端に減っている。しかも118人は65歳以上という、高齢化の進んだ地域である。

地域資源を活かす

富倉地区は、天水田の米所であった。傾斜地に棚田が張り付いていた。その土手には畦豆が作られ、沢筋の国道からはその畦豆や小豆しか見えない。それも過去のこととなり、今ではほとんど耕作放棄されてしまっている。そのため、春の雪解けで地滑りの原因となることも多い。

条件は悪いが、土地は肥えている。山菜は、昔からいいものが取れた。山ウドやコゴミなどを取って来て売り、地域の活性化につなげられないかと考えた。こうして86年5月に「富倉山菜まつり」が開かれた。翌86年からは、毎月第二日曜日に朝市として、「とみくら市」が続いている。5月の山菜祭りで始まり、11月の新そば祭りで終わるといふ、地域住民の運営するイベントである。

富倉にはかつて亜炭を採掘した所がある。鉱泉も湧き出ており、一緒に出ている天然ガスを引いてきて沸かせば、天然の温泉になるではないかと思立った。仲間に出資を呼びかけ、ガスを集めて鉱泉とともにパイプで集落裏まで引いてきた。農業委員などの、富倉を勝手に愛する会の活動である。滝の脇集落にある、知る人ぞ知る、秘湯である。

郷土食

富倉のそばは、地元でヤマゴボウと呼ぶオヤマボクシの葉の繊維でつなく、独特なものだ。富倉ではお客などがあると、必ずこの手打ちそばと笹ずしでもてなす。笹ずしは笹の葉の上にすし飯を乗せ、その上に山菜や大根の味噌漬の油炒め、くるみなどを乗せた押し寿司の一種である。川中島出兵の上杉謙信に差し上

げたもので謙信ずしともいわれ、食糧庁のお握り百選にも選ばれている。

このそばや笹ずしを味わった県職員などの中から、商売で食堂をやってみたらどうかという声が多くなってきた。農家の茶の間や座敷で食べる、予約制のそば処の開店である。それが、現在では常に営業しているところも出てきている。かつての学校跡地には、住民が共同で出資して経営している「かじか亭」もでき、そば好きな人達でにぎわっている。

鍋倉高原森の家

国営農地開発事業

飯山市北部の新潟県境は、特に雪の深いところだ。人の住むところで、3～4mもの雪が毎年積もる。こんな場所で、国営の農地開発事業が行われた。痩せた火山灰土壌であり、雪のため、農業は5月から10月までの6か月間に限定される。厳しい条件であり、もうけを生み出すのはなかなか難しい。現在では様々な作物が栽培されているが、土地利用率は高いとは言えず、260haの農地をもっと有効に活用したいという課題がある。

民宿事業の転機

民宿は、50年代後半から、冬だけのスキー民宿として始まったものだ。夏の学生の合宿などにも手を広げてきているが、現在でも、冬場だけの経営というのも多い。とかく冬場偏重ぎみで、夏場の営業を拡大することが課題となっている。経営者の世代交替という時期とも重なったため、ベッドと朝食だけを提供するという、価格が安く滞在型の簡易宿泊形式も検討してみることがあった。

グリーンツーリズム

以上二つの課題解決を目指して取り組んでいるのが、グリーンツーリズムである。宿泊の場は、民宿がすでにある。自然や文化、先賢の知恵や民俗、農地や山林などをどうやって体験や交流に活かしていくかに、頭をひねった。構想では、標高300mの千曲川から1,300mの鍋倉山まで、1,000mの標高差の空間を交



流と体験の舞台としている。ここに住む住民たちの季節との係わり方、暮らしの知恵、祭り、民俗、地域の食材、自然そのものなどが素材となる。視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚すべてを使って体感してもらおうという内容である。

施設としては、開発された農地の中心地に拠点を整備した。様々な体験の場であり、運営の中心ともなるターミナルハウスと宿泊用のコテージ10棟が、林の中にできた。「森の家」と愛称を付け、経営は第三セクターの飯山市振興公社があたることになった。ちなみに、農林漁業体験民宿の登録数は、全国一である。

外部スタッフ導入

柄山集落にある「森の家」の運営にあたっては、広く若いスタッフを募集することになった。全国から多数の応募があり、その中からインストラクターとして男性2人、女性3人が採用された。体験メニューも雪下ろし、クロスカントリースキー、かんじきウォーク、山菜採り、森林観察、きのこ採り、炭焼き、草木染め、ソバ打ち、紙漉き、カヌー、星空観察、トレッキングなどなど盛りだくさん。100名を超える市民インストラクターも登録されており、どんな体験への希望にも応えられるようになっている。

外からの風は、確実にその周囲を変えた。14戸24人、6割を超す高齢化率(95年国調)の柄山集落は、5人の若者の加入で一気に平均年齢を下げた。炭焼き名人やソバ打ち名人、ワラ草履作り名人、ウサギ追い名人などが改めて評価されて、自信がついてきた。同時に、地域の自然や文化に誇りをもてるようになってきた。40年ぶりに、祭りも復活された。まさに、地域の活性化である。今後の更なる展開に期待したい。

小 菅 の 里

集落計画づくり

小菅の里は、野沢温泉村と境を接する山村である。1,300年余の歴史を持つ小菅神社を中心に、歴史的建造物や文化財も数多い。菜の花咲く北竜湖、という観光資源にも恵まれている。が、人口減少が進み、課題を数多く抱えていた。道路整備、用水路管理、観光事業の新規展開、祭りの維持、役職の平等化と軽減などである。

こんな課題を少しずつ解決したいという思いで取り組んだのが、長期計画づくりである。新たに、むらづくり委員会が組織された。私も委員の一人として、事務局となった。7人の委員が1年がかりで作上げた計画は、92年3月に印刷され、全戸に配布された。「歴史と自然が織り成す日本のふるさと……小菅の里。」というタイトルがついた計画書は、60ページほどの、手作りのものだ。

宝物を磨き、情報発信

計画書は「行政運営と生活」、「交通と雪対策」、「歴史と自然、伝統文化と祭り」などで構成されており、行政関係者にも広く配布された。地域の課題解決のために、少しでも支援してもらいたいという願いを込めて……。

計画に基づく活動も、様々に行ってきた。主に、環境保全や地域の宝物についての情報発信である。県無形民俗文化財の祭りの一部始終を綴った「小菅の里夏物語・柱松」、地域に伝えられる伝説や昔話などを集めた「小菅の里物語」、「小菅の里案内図」、「一步二歩散歩小菅の里漫歩案内図」のそれぞれ編集と発行、活用である。集落内の道路脇にはベゴニアのプランターを並べたり、集落までの道路脇には桜やアジサイ、スイセンを植えて、緑化に努めている。裏山の雑木林にたくさんあるカタクリ増殖のための下草刈りも、活動の一つだ。

草を刈る……

集落南側に、2 haほどの荒廃した湿田跡地がある。一面がヨシやガマの原である。これをなんとかしたいという思いで、公共事業で整備した木道沿いの草刈り

を続けている。泥ですっかり埋まった水路を、何とか昔のようにフナやドジョウの棲む小川にしたいと、泥あげを続けている。

それにしても、植物の生長は早い。日本の農業は雑草との闘いであるが、ヨシは1ヵ月で1m近くも伸びる。5月から8月まで毎月1回の草刈りを続けないと、瞬く間に草藪となってしまふ。木道沿いに植えたハナショウブの管理や自生するミツガシワ、ミゾソバなどの観察を楽しみに、委員3~4人で作業を行っている。

集落の人達にも参加してもらえば作業も楽になるが、水路普請などの集落の共同作業を増やしたくないという思いがあるため、汗びっしょりの半日近い作業となる。そこで、外部からの参加を呼びかけることにした。一緒になって「ふるさとづくり活動」をしませんか、というものである。毎月の第四土曜日に来てもらって、この日は地域の散策などをして、民宿泊となる。翌日曜日の午前中が、草刈りなどの作業である。97年からの呼びかけであり、参加者は限定されているが、少しずつ増やしていきたい。当面、資金と労力の確保が、最大の課題となっている。

新・みずほの国づくり

菜の花のふるさと

瑞穂地区は、西側に千曲川が流れ、飯山盆地の東北部に位置している。人口2,500人余りの、農村地帯である。小菅の里も、瑞穂地区の一部になる。この地方在来の漬け菜が「野沢菜」と呼ばれるようになるまでは、地域一帯で種子生産が行われていた。春の菜の花である。千曲川の流れと残雪を背景に咲く菜の花は、油採取用ではなく、野沢菜の種子栽培なのである。

地区計画づくり

瑞穂地区の長期構想づくりは、市の呼びかけに応える形でスタートした。特定農山村法に基づく、中山間地域活性化推進基金の活用である。11ある集落の戸数に応じて委員が選出され、96年、委員39人からなる瑞穂の郷づくり委員会が組織された。そして、2年間をかけて、長期構想を取りまとめた。「新・みずほの国づくり構想」というものである。



構想は、地域の宝物を自らが掘り起こして磨き、情報発信を行うとともに来訪者への案内や交流を通じて活性化に結び付けようという内容になっている。「実りの里（産業社会）」、「いのちの里（福祉教育）」、「交流の里（自然文化）」それぞれに花々を咲かせたいというものだ。菜の花まつりの地域全体への拡大、文化財等地域資源を生かすためのウォーキングコースの設定やマップの作成、ホテルの増殖、石積の棚田の活用、「瑞穂」へのこだわりをもった地域づくりなどの計画がある。

平成11年11月11日建国1周年

98年は、構想の編集と記念イベント開催を目的に、19人の委員で活動が続けられた。私（鷲尾）が事務局長となり、構想のまとめからの行きがかりもあって、編集を引き受けた。発行は、記念イベント開催の11月1日である。

イベントは、全国から「瑞穂」さんという人に来てもらおうということになった。前日の土曜日に歓迎会を行い、当日の日曜日はまず地域をマイクロバスで案内し、菜の花公園にアジサイの記念植樹の後、屋外ステージで記念式典というものだ。「瑞穂」さん募集を多くのマスコミに取り上げてもらったため、問い合わせが全国から寄せられた。実際に参加したのは、北海道から九州までの39人である。この39人に名誉国民になっていただき、情報発信に一役買っていただくことを考えている。

当日は、それぞれの「瑞穂」さんに名前の由来などを語っていただき、晴れた秋の日のまさに記念すべき交流となった。「同窓会をぜひ開いてほしい」という

要望が、相次いで出てきたほどである。今年と来年は、地域の特産物を送る約束になっている。完成したばかりのピンバッジやウォーキングマップ、絵葉書、便せん、菜の花の種袋の活用もこれからだ。平成11年11月11日には、瑞穂郵便局から全国の瑞穂さんあてに、建国1周年の便りを出したいと思っている。

飯山市イベント行事案内

北信州いいやま田舎体感ツアー

問い合わせ：森の家 0269-69-2888

- 5月22～23「大農場で、種蒔きから収穫まで」
(夏秋野菜の種蒔きと山菜採り)
- 6月19～20「ハーブ園でのガーデニング」
(木の枝でのプランターづくりと植え込み)
- 7月10～11「星とほたるの天の川」
(夏野菜収穫、ほたる鑑賞、ブナ森林浴)
- 25～26「99世紀末のそばづくり」
(ソバまきとソバがら枕づくり)
- 8月1～2「99世紀末のそばづくり」
(ソバまきとソバがら枕づくり)
- 9月11～12「千曲川カヌーツーリング」
(カヌー講習と流木・自然石アート)
- 10月17～24「1週間体験、森の分校」
(カヌー体験、巨木のブナ林探検、炭焼き体験)
- 11月13～14「野沢菜漬けて、芋煮会」
(野沢菜・里芋収穫、野沢菜の草木染め、芋煮会)
- 12月18～19「日本の冬・なべくらの冬」
(かんじき作りと田舎屋の雪囲い)

小菅の里、ふるさとづくり活動の旅

問い合わせ：小菅むらづくり委員会

0269-65-3558 (夜間：真島一徳・委員長自宅)

0269-62-3111 (日中：飯山市役所鷲尾恒久・事務局)

- 4月18(日)「春爛漫の里山観察会」
(カタクリ、福寿草、イチリンソウ、ヒトリシズカ)
- 5～10月 第四土曜日と翌日曜日「週末田舎体験の旅」
(草刈りなど里地保全作業)

近くの民宿 (@6,000～) を紹介します。

イベントカレンダー

問い合わせ：飯山市役所商工観光課 0269-62-3111

5月3～5「奥信濃スケッチまつり」

(戸狩周辺、菜の花公園、北竜湖などでスケッチ)

中旬「とみくら山菜まつり」

(ウド、コゴミなどの朝市)

6月中旬「藤沢山菜まつり」

(山タケノコ、フキなどの販売)

7月上旬「奥信濃特産まつり」

(飯山仏壇、内山紙など伝統的工芸品の展示即売)

8月上旬「みゆき野ライン健康ウォーキング」

(みゆき野ラインから飯山まで)

9月上旬「なべくら高原そば花まつり」

(高原野菜の即売会など)

10月下旬～11/上

「コシヒカリ新嘗祭・野沢菜漬け込みと露天ぶろの旅」

(信濃平)

「隠れ謙信手打ちそばと露天ぶろの旅」(信濃平)

11月中旬「富倉新ソバ祭」

(取れたての新ソバを使った手打ちそば)

お知らせとお願い

里地通信への寄稿のお願い

昨年度1年間、各地の取り組みを見させていただき、いくつかの取り組みに関して、事務局より紹介させていただきましたが、今年度は会員の皆様の活動を、『里地通信』を通じて、また、里地ネットワークで定期的に原稿を書かせていただいているメディアへ、直接取り組みを紹介させていただきたいと考えています。

そこでお願いです、皆様の活動紹介の写真、文章を、事務局宛にお送りください。

完全原稿でなくても結構です。いただいた原稿をもとに事務局で、手を加えることもできます。また、参加者募集や、専門的な知識募集など、募集項目があればさらに、面白いものになると思います。形式は問いません、皆様の原稿をお待ちしています。

地元学のインストラクター養成講座

今年度、三重県市町村会(団体会員)では、三重県職員を対象として、地元学の研修講座を計画中です。この講座へ、事前研修を行った上で、指導員補佐を務めていただける人を募集したいと考えています。興味のある方は、事務局まで、ご一報下さい。正式に決まり次第、優先して連絡を行なわせていただきます。

里地塾の塾生募集(セミナーボランティア!募集)

里地セミナーを、運営(事前検討会、記録、撮影、編集、運営)していただける人を塾生の形で募集しています。主に首都圏の大学生などを対象にしています。塾生について関心のある方は、事務局に、お問い合わせください。

里地ネットワーク事務局より 1999年度事業計画について

初年度である1998年度は、日本財団およびイオングループ環境財団の多大なるご支援をいただき、東京での連続セミナー、北海道標茶町、秋田県二ツ井町、岩手県東山町、東京、愛知県美浜町、天竜川流域活動、熊本県水俣市において調査事業を行いました。

本年度は次のような方針で活動を行う予定です。

里地セミナー（東京）

イオングループ環境財団のご支援をいただき引き続き東京での「里地セミナー」を行います。本年度はやや上級編です。日程はすでに決定しておりますので、出張予定等事前調整いただき、ひとりでも多くの方々のご参加をお待ちしています。（本紙掲載）

「地元学」の実践研修（三重県）

団体会員である三重県市町村会より、三重県内の全市町村の職員（各市町村平均7名程度）を対象とした地元学研修の実施支援の要請がありました。昨年モデル調査を行った愛知県美浜町での事例を、三重県全域で実施できないかという担当者の熱意が伝わります。この実施支援要請は、水俣の地元学協会と里地ネットワークへの依頼要請ですが、三重県全域で、火種があれば、環境保全型里地づくりの理念が、多くの人々に伝わるのではないかと祈念し、要請を受けることと致しました。

実施回数は、10回。日程は、以下を予定しています。ぜひとも、皆様のご支援ご協力をお願いします。ご協力いただける方には、まず、事前講習付きボランティア参加していただき、3回以降は、指導者として参加

していただく予定です。

実施日（いずれも平日です）：

5/20-21、6/9-11、7/7-9、7/29-30、8/4-6、9/2-3、10/7-8、10/19-20、10/27-9、11/1-2

場所：三重県内（地域は未定）

連続シンポジウム 「新田園生活のすすめ」

団体会員である国際航業株式会社からの要請で、昨年実施した「新田園生活のすすめ」シンポジウムを、2カ月に1度程度の割合で開催します。今回は、5月15日（土）東京銀座ガスホールで行います。

津端修一氏、湯川豊彦氏、クラインガルテナーの利用者であるご夫婦の方々にパネラーとなっていただき、農的な暮らしの素晴らしさと田園生活の実践方法を語り合います。

環境保全型里地づくりの ガイドブック作成

郵政省「おとしまま」の補助金のご協力をいただき地域づくりガイドブックを作成いたします。

詳細内容は、次号以降にお伝えいたします。

里山シンポジウム および里山保全活動

現在会員である数団体との間で、里山シンポジウムと里山保全活動の実施を検討しています。自分たちの地域で、シンポジウムと里山保全事業を行いたいという要請がありましたら、事務局までご連絡ください。実施場所の検討資料に加えさせていただきたいと思えます。概要は次号でお知らせいたします。

里地通信

昨年度同様、里地通信を発行いたします。今年度は、幹事紹介に変えて、会員紹介を巻頭にいたしますので、各地のご協力をお願いします。初回は、長野県飯山市です。

里地ホームページ

今年度は、会員情報とイベント情報の充実に努めていきます。

会員相互の情報交換もデータ上でもできるようにと考えています。ぜひともご協力をお願いします。

その他検討中のプログラム

里地ネットワークでは、さまざまな出会いを通して、実務家の皆さんにアドバイザーになってくださいとい

うお願いをしてきました。今年度は、この皆さんに個別に連絡を差し上げて、アドバイザーリストの公開とアドバイザーの方々からの実践報告を紹介させていただこうと考えています。会員間での相互支援により環境保全型里地づくりが実践されることを期待しているためです。

米代川流域での流域文化づくり

秋田県二ツ井町より米代川流域での「杉と住まいの町づくり」のサポートの連絡をいただいています。6月2日前後に、ミニシンポジウムを開催するそうです。ご関心のある方は、二ツ井町でお会いしましょう。

グリーンツーリズム

熊本県および相思社（水俣市）よりグリーンツーリズムの実践に関する里地ネットワークから協力要請がきています。昨年同様、実施する可能性がありますので、ご関心のある方は、事務局あて、ご連絡ください。

皆様のご要望をお待ちしています。

1999里地セミナー計画

今年度の里地セミナー（東京開催）について、以下の通りスケジュールが決まりました。5月、6月の詳細は、このあとのページをご覧ください。

5月28日（金）10:30～14:30

「楽しんで山仕事をしよう。
K O A 森林塾の試み」

講師：島崎洋路
元信州大学教授、
島崎山林研修所長

5月29日（土）10:30～14:30

「伝統民家は究極のエコロジー住宅」

講師：鈴木有
秋田県立木材高度加工研究所教授
場所：リクルート銀座エイトビル

6月15日（火）14:00～18:00

「むらづくり論・むらで生まれた発想
・自己発見の技法」

講師：玉井袈裟男
元信州大学名誉教授、風土舎主宰

6月16日（水）10:30～14:30

「米沢郷牧場・自然循環農業と
ゼロエミッション」

講師：伊藤幸吉
米沢郷牧場代表、
全国産直産地ネットワーク代表

7月16日（金）15:00～19:00

「浅草商店街の活性化と
振り袖さんの復活」

講師：東京都台東区役所、
商店街活性化グループ「おかみさん会と振り袖さん」
場所：台東区浅草の「おかみさん会」発祥の地

7月17日（土）10:00～13:00

「エコツーリズムと自然に聴く旅」

講師：瀬田信哉
自然公園美化管理財団専務理事

8月27日（金）14:00～18:00

「心を育む総合学習・
付属鎌倉小学校での実践」

講師：小池敏夫
横浜国立大学教授、
同大付属鎌倉小学校元校長

8月28日（土）10:30～14:30

「土の子育て・自立できる子
・親を育む実践報告」

講師：相川明子
鎌倉市山崎の谷戸を愛する会代表、
青空保育なかよし会
場所：鎌倉市山崎の谷戸にて

10月1日（金）14:00～18:00

「自分たちの地域はみずから創ろう
・標茶町での地域振興会活動」

講師：橋本勲
北海道標茶町元総務部長、
現標茶町町史編纂委員

会場は、指定のものを除き、
環境パートナーシップオフィス会議室

東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2
地下鉄銀座線 表参道駅より徒歩5分
青山ブックセンター（B2）と同じフロアです。
お問い合わせは、すべて、里地ネットワークへ

5月6月の里地セミナー案内

参加ご案内

【会場】5月29日を除き、環境パートナーシップオフィス会議室

東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2
地下鉄銀座線 表参道駅より徒歩5分 青山ブックセンター（B2）と同じフロアです。

5月29日はリクルート銀座エイトビル11階第6会議室にて開催。

【定員】30名程度（講演の後オープンディスカッション形式で討論会を行います）

【参加費（資料代）】里地会員...500円、
一般...1,500円、ボランティア...無料
会員へはその場で登録可能、ボランティアは事前問合せのこと

【申込方法】巻末の申込用紙をご利用ください。

5月28日（金）10:30～14:30

「楽しんで山仕事をしよう。」

KOA森林塾の試み」

講師：島崎洋路
元信州大学教授、島崎山林研修所長

講師紹介

昭和3年、長野県駒ヶ根市生まれ。70歳。元信州大学農学部教授、演習林長、専門は林業経営。平成6年、定年退官後、地元KOA株式会社が年15回開催する森林塾で山づくりの指導を行う。現在、島崎山林研修所を主催し「山造り承ります」の看板を出し地元伊那の山造りを行う。

Q：杉やひのきの森が手入れされずに荒れていると聞きますが、どのような状況ですか？

A：木を育てるには、植林してから早いもので30年、木によっては、80年や100年以上という時間がかかります。先祖代々長い時間をかけて育ててきた山も、今、輸入木材の価格に押されて、伐採しても採算にあわないから放置してあります。輸入材に対抗できる価格で売ると賃金がでない。出ても他の産業に比べたら安い、安いから人がいなくなり、山が元気をなくしていく。林業経済という側面だけでとらえていくと、森林組合でも営林署でも採算にあわない山は手を出せないという状況でしょうか。

日本の森林のおよそ半分は私有林（民有林）で、それも、5ヘクタール以下の小規模な山林所有者が90%以上です。小規模な森林所有者は、ここ20～30年間、山の手入れをしていない山もちが多い。手入れしない結果、光の入らない痩せた林、枯れた木、腐った木の混じりあった荒廃した林になってしまう。光が入らないことで、森の中の微生物も減少し、森が活性化せず、山の恵みも少なくなる。荒廃すれば、より採算にあわないから、さらに手入れしない。かといって、山林は売っても1ヘクタールあたり、100万円～200万円くらいにしかならないから売らない。山もちではなく、土地もちになってしまった。山を開放してやらないと、山はいっそう荒れ果てるばかりだ。

Q：島崎先生は、信州大学在任中から、地下足袋と作業服姿が当たり前で、退官と同時に山林研修所を開かれたと聞いたのですが、どのような思いから開設されたのですか？

A：大学当時から退官したら、山造りをしようと決めていました。大学で論を言っても山の現場から、どんどん人がいなくなり山が荒れていってしまう。でもね、1ヘクタールの山なら、年に、3日から4日作業すれば、山はきれいになる。放っておくと、10年なら10年分の作業（30日から40日分）をしなければ、きれいにならない。毎年、庭仕事をするように楽しみとしてやってもらえれば、山は見違えるほど良くなる。手入れされた山の中には素晴らしいことが沢山ある。やればできるのに、やらないだけなんです。こんな思いから、研修所をつくったんです。森林所有者や山

に興味のある人と、山造りを楽しんでやる。山造りをしながら、技術や山の素晴らしさを知ってもらいたいです。

Q：どのようなことを山林塾では教えられるのですか？

A：年に15回、林学科の3年間の林業実習で学ぶことはすべて体験してもらいます。研修後に地元に戻って、身近な里山づくりをしている人もいて、電話で相談してきたり、森林塾以外の日にも、わからないことがあると、尋ねてきて来て勉強していますね。

一緒に山造りするような人は、山造りの楽しさわかっているから、とても習得が早いですね。森林塾は、年に15回だけど、住み込みで1年、2年勉強したいと、企業を辞めてきたような人が、今年は4人もいますよ。

Q：ここ30年間、山の手入れを怠っている日本の山林所有者は、いったいどうしたらいいんですかね？

A：山仕事は大変だとか義務だとか思わずに、山の手入れができるのは特権であり、楽しみとして山仕事をやるということ。山づくりは素人にもできる。幸い一番手のかかる植林や下草刈りは終わっているから、林を空かしてやればいい。鳥が喜ぶ木を残すとか、人の心を引きつけるような木を残すとかすれば、すぐに人と自然が共生した公園のような森になる。山造りのノウハウをしっかり学んで、庭しごとの感覚で山造りをやって欲しいんです。長いこと放置された山林の場合は、悪い木を選んで伐採するのではなく、残したい木を選んで、その木が元気になるように、樹齢と樹高から、その木に必要な範囲の木を、思いきって切ってやるといい。光が入ると木は凄い勢いで大きくなっていきますよ。自分の描く山の姿に山造りができるのは、山林所有者の特権だと思って、楽しんで行って欲しいですね。

5月29日(土) 10:30~14:30

「伝統民家は究極のエコロジー住宅」

講師：鈴木有

秋田県立農業短大校付属木材高度加工研究所教授、
工学博士・一級建築士

講師紹介

1938年生まれ。京都大学大学院工学研究科 修士課程修了、1964年同大学防災研究所助手として、耐震工学を専門に研究生活に入る。1976年金沢工業大学建築学科教授。建築構造学全般の講義を担当、耐震工学に加えて、都市防災学を専門に研究を続ける。1997年木質構造学の研究担当として現職に。

金沢に移って以来、木造建築の耐震、耐雪性についての研究を始め、石川県や金沢市の委託を受けて、「雪国の伝統的木造住宅の耐震診断・改修指針」や住宅金融公庫の割増融資を伴う「高耐震住宅基準・北陸版」とその「図解マニュアル」などをつくるまとめやくを努めた。阪神大震災の甚大な木造被害の発生を契機に、木造についての研究実績が注目され日本の伝統木造工法の建物をもつ意外な粘り強さに驚き、その構造に潜む強さのメカニズムを解明し、伝統工法を現代の木造建築に復権・再生する試みを続けている。

木造建築研究フォーラム、これからの木造住宅を考える会、数寄屋建築研究会、地球村、オイスカの各会員。域防災計画の策定の他、木材・木造住宅振興を初めとした地域づくりの委員・講師として全国各地の地域振興にも携っている。

今回のセミナーでは、日本の伝統民家の素晴らしさを教えていただきます。

自然景観との調和、風土によって磨き上げられた伝統の技術、人々の暮しと調和したデザイン、そして、ここから生まれる安らぎ。伝統民家に凝縮した生活文化の厚みをスライドで実際に見ながら学んでいきましょう。

私たちが失いかけている「住まう」ことの素晴らしさ、安らぎ、落ち着きというもの、何から生まれてくるのか、そして、それが、どのように人と人の関係、人と自然の関係にも結びつくのか、お話が楽しみです。
(会場が他と異なります。ご注意ください)

6月15日(火) 14:00~18:00

「むらづくり論・むらで生まれた発想
・自己発見の技法」

講師：玉井袈裟男
元信州大学名誉教授、風土舎主宰

講師紹介

長野県内の地域振興（元気の源）といえば、玉井先生のことを知らない人はいないのではないかというくらい著名な人です。でも、私は知らなかった。交流と学習、農村の人々が元気がなくなったら、この人に相談すれば元気になるという不思議な力を持った人です。風土舎の設立理念を紹介して、玉井先生の紹介にかえます。（里地事務局・竹田）

「風」とは、他所にあって知識や技術、社会の動向などの情報提供者のこと。農協、役所、大学、研究所などの機関や諸処の法令や規則、制度などのことをいう。

「土」とは、地のもの、大地に根を下ろして、そこに住むものごとをいう。
また、地域の自然、風景、産業、産物、歴史、民族、教育、文化など、全て、「土」と考える。

この「土」と「風」の組み合わせによって、地域の活性化を図る。

「舎」とは、「ゆったりとした休息する場所のこと」。つまり、仲間が集まって、企みをするところのことである。

「風と土」(風土舎宣言より)

風は、遠くから理想を含んでやってくるもの
土は、そこにあって生命を生み出し、育むもの
君、風性の人ならば、土を求めて吹く風になれ
君が、土性の人ならば、風を呼び込む土になれ
土は、風の軽さをわらい
風は、土の重さをさげすむ
愚かなことだ
風は、軽く、涼やかに
土は、重く、温かく
和して文化を生むものを

6月16日(水) 10:30~14:30

「米沢郷牧場・自然循環農業と
ゼロエミッション」

講師：伊藤幸吉
米沢郷牧場代表
(270人の生産者からなる農事組合法人)
全国産直産地ネットワーク代表

講師が代表する米沢郷牧場の紹介

私たちは、農民自ら生産したものを売るべきだと決意し、生産から販売まで含めた農業、外部からできる限り資材や原料を買わないで、地域内で循環できる農業を目指しています。循環型農業は、先祖代々行われていたバランスのとれた有畜複合農業にその本質があります。風土や土地に合ったバランスの取れた生命循環をうまく活用した農業が必要であることに気がきました。こうしてできあがったのが自然循環農業集団リサイクルシステムです。

米沢郷牧場の自然と人に関する考え方は、「あらゆる場面で人も自然も共生しあえるということ」「あらゆるものを循環させることから農民の自立がはじまる」ということです。

具体的には、家畜の糞や餌は極力地元で取れたものを使い、自分たちで作る。

決してものを捨てない。自給と循環を生産の現場に具体的に作り出そうと米沢郷では一環して努力しつづけてきたシステムです。家畜の糞尿、野菜や果物の屑、もみガラ、豆腐粕などは発酵の過程を経て、飼料や堆肥として循環する。もう一つの特徴は、BMW技術です。牛の尿を何曹もの樽を通しながら、自然石や腐葉土で処理し、バクテリア(B)とミネラル(M)で活性化させた水(W)のことで、家畜の飲料や田畑に用いる米沢郷の物資循環の要となる技術です。このような技術は、現在の科学技術に対するもうひとつの技術で、化学肥料や農薬を無用としながら農業労働の厳しさを軽減し、収穫量を増やしかつ生産コストを引き下げる。あたらしい有機農業のありかたをしめしています。（雑誌「環境」8月号より抜粋）

イベント・募集案内

里山インタープリターズキャンプ ～スギ・ヒバ・竹林の再生～

3回目を迎える里山インタープリターズキャンプ。
今回は、人工林の再生を行います。

枝打機を使用して、スギの枝打ちをし、林床植物へ光を当てて、スギ林と広葉樹とを共存させる混合林づくりを目指します。また、森の中にモノレールを設置し、間伐材の運搬法の実験をします。

人工林の再生作業や講座、交流会、等が行われます。ゲストに中川重年氏（全国雑木林会議）司会進行に川嶋直氏（日本環境教育フォーラム理事/キープ協会）を迎えて、里山づくりに関わる人、関わろうとしている人を対象に開催します。

日時：5月14日（金）～16日（日）

場所：愛知県豊田市岩倉町 エコの森ハウス、フォレストヒルズモデル林

参加費：20,000円（宿泊・食事代含む）

募集人数：30人

募集締切：4月30日（金）

**お問い合わせ：エコのもりセミナー事務局
（担当：鈴木・青木）**

tel:03-3475-7738 fax:03-3475-7735

今後の予定として、6月19日（土）～20日（日）「森づくりミーティング&フェスタ（仮）」・6月20日（日）「第4回森遊び倶楽部」も予定しております。

（財）水俣病センター相思社職員募集

昨年度行われたエコ水俣フィールドツアーにて、現地での受け入れ側として活躍していました（財）水俣病センター相思社。以下の部門強化のため、職員の募集を行っています。

グリーンツーリズム部門

野外派を求む！フィールド整備、ガイド、環境学習、相思社日常業務など

資料整備部門

こつこつ派を求む！水俣病関連の資料などの整理・保存・管理、相思社日常業務など

共に年齢・学歴・性別は不問。ただし、若い人優先。要普通免許。

お問い合わせ先：

（財）水俣病センター相思社（担当：弘津）

tel：0966-63-5800 fax：0966-63-5808

E-mail：soshisha@fsinet.or.jp

推薦書案内

食農教育（「総合的な学習の時間」の総合誌）（各800円）

- 1998年夏号（No.1）「育てる 食べる から始まる授業プラン」
- 1998年秋号（No.2）「食と農」は何故「総合」の教材たりうるか
注目の炭とケナフで環境学習
- 1999年冬号（No.3）もっと自由に「総合学習」食と農を起爆剤にして
移動教室・修学旅行での農業体験
- 1999年春号（No.4）「地域の先生」を生かす総合的学習
学校農園が楽しくなる！育てて遊ぶアイデア集

21世紀の日本を考える 食料・農業・農村 第5号(各400円)

「環境との新たななかかわりを求めて」(国立環境研究所 森田恒幸・京都大学 内藤正明教授)
 座談会：里地ネットワークも参加しています。他
 発行 社団法人農村漁村文化協会(農文協)

第一回 家の光生活文化クイック・リサーチ グリーンツーリズムに関する調査報告書

雑誌・単行本の出版や多彩な文化活動を通じ農村の生活文化向上を目指し、JAグループの一員でもある(社)家の光協会が、グリーンツーリズムに関する調査報告書を出しました。

調査対象と方法：首都圏在住の20～60代の女性200名への電話による調査

内容：グリーンツーリズムへの認知度と経験、関心、見解、嗜好などの調査。具体的には、同伴者、泊数、旅の費用、宿泊場所、季節、地域などの事項や、民宿、田舎暮らしへの意識調査が含まれています。グリーンツーリズムについては、全体では、「非常に関心がある」とした割合が17.5%、「やや関心がある」とした割合が43.0%で合計60.5%が関心があると答えており、年齢別に見ると、50代を除いて、若い年代ほどスコアが高い。50代での「非常に関心がある」と回答した割合は32.5%で突出しており、この層が現状におけるコア・ターゲットになっているなどの特徴が伺われます。

問い合わせ：(社)家の光協会文化センター・森さん(03-3266-9036)



